特116
798

眞正の教育

工學博士 靑柳榮司

始

4手116
798

眞正の教育

工學博士　青柳榮司

人として最も大切なるものは人格である、卽ち人格を完成することが人間の最後の目的でなければならぬ。蓋し各人が其の人格を完成することに於て始めて所謂最高の文化―理想の社會そのものを具現することが出來るのである。而して此の人格の陶冶は第一に教育の力に俟たなければならぬこと勿論であるが之に就て考察するに當り、先づ吾人の「習慣」なるものが甚だ重要なる意味を有することを見逃してはならない。

今日心理學者の說に據れば「習慣」は身體內に於て一種の「カーレント」が特定の部分に流通し易くなる結果の作用であるとされて居る。

此の「カーレント」の本體は如何なるものであるかに就ては、併し未だ十分に確められて居ないやうであるが、とにかく私は次の事實の存在することを信じ且つ之を認めて居る、吾人が常に俯仰天地に耻ぢざる淸き精神を以て善き行爲を絕えず繰返して居ると、次第に之に適應するやう心身の組織及機能の全系統に或る生理的變化が起り、所謂、心身が鍛錬され馴致されて、容易く善行を爲し得るに至るものであつて、これが卽ち「良習慣」であり、之に反して、「惡習慣」とは、不純なる精神を以て惡しき行爲を度々重ぬる中に右と反對の結果を釀成するに至るものである。卽ち謂ふ所の『習慣は第二の天性』とは此の事である。譬へば、平常利己主義のもとに生活せる者は、凡ての行爲が自然に利己的に傾き易く、偶々利他的に行爲せんと欲するも異常に困難を感じ、或は遂に不可能に終るのである。然るに利他主義を以て信條とし且つ之を實行せる者は、次第に、一擧一動期せずして奉仕的となり、利己的行爲は却つて之を苦痛とするに至るのである。

更に他の卑近なる例を取つて云へば、若き婦人殊に女學生等ぞは、よく無意味に笑ふものであるが、之が習慣を成す結果は決して笑ふべからざる場合に、而も其の笑ふべからざる理由を知りつゝ、自ら禁じ得ずして失笑するが如き非禮を敢てすることが珍しくない。之れ習慣の罪であり、斯かる習慣を馴致した彼等自身の罪である。若し平生から、笑ふべからざる場合には決して笑はざる習慣を養成し置くならば、敢て意を用ひずとも斯くの如き不作法は起らない筈である。

而して訓練の效果の顯著なることは彼の自轉車の稽古に就て見るも明かである、最初は顚覆衝突等種々の失敗を演ずるが、熱心に練習を積む中に遂に自由に乘りこなし得るやうになり、果てはハンドルを手離し又は他の事を考へながら、步行する場合と何等異なることなく、間違ひなく目的地へ到達し得るやうに熟達するに至るのである。

吾人の目的とする所の人格の陶冶も全く如上の習慣を道程として遂行さるゝものである。卽ち天地神明に耻ぢざる淸き精

15.2
交内

神を以て善き行爲を繼續的に繰返すことに依つて、腦、脊髓、神經、血管、內臟（機關及腺）、大小筋肉等に或る生理的變化を生じ、之が爲め益々善良なる行動を容易ならしめ、依つて以て一層人間的價値を向上せしむるものに外ならないと私は信ずる。

之を他の方面より觀察するに、人は幼少の時より是非共、信仰卽ち宗教的信念――時代に適應せる健全なる新宗教、又は既成宗教より其の弱點弊害を完全に除去したる精髓とも云ふべきもので、何れも現代の科學や道德と毫も抵觸する所無きものたることを要する――の素地を作つて、之に依つて淸き精神を培ひ、此の精神のもとに凡ての行動を統制することに依つて、心身の系統に生理的醇化を與へ以て人格の陶冶向上を圖ることが最も肝要である。換言すれば、人體の發育期より常に智育に伴ふに適當なる宗教々育及び體育を以てすることを忽にしてはならないのである。

云ふまでもなく、人格の完成は智情意の圓滿なる發達に在る此の三者は決して引離すべからざるものである。就中情意卽ち精神は我國現時の狀況に於ては特に重要視すべき因子なることを痛感せらるゝが、之に就ては後に論ずることゝし、右三者の中智は主に學校教育に依つて與へられ、これを生理的に云へば、智育は大腦皮質の發達にして、所謂理智を司るものである。又情意は多く宗教々育及び體育に依つて養はれ、生理的に云へば情育は腦、脊髓、神經、血管、內臟（機關及腺）及大小筋肉（主に表情筋）の鍛錬にして情操を養ふものであり、意育は腦、脊髓、神經、大小筋肉等の鍛錬にして、意志を强固にし實行力を賦與するものである。斯くの如く其の鍛錬を與ふる身體の部分が夫々相異るが故に其の何れの部分にも偏せず全體的に之を發達せしめなければならぬ。是れ學校教育と共に宗教々育及び體育の忽にすべからざる所以である。

勿論學校教育の內にも情意教育を含み得る筈であるけれども今日の我國教育界の狀況にては、其の效果極めて貧弱なるを免れざるが故に、一般世人の云ふ通り、學校教育は智育を主とし從つて兎角理窟に奔り溫か味を缺き實行力の伴はざる人になり易しと評せらるゝも亦其の筈であつて之れ情意の鍛磨を忽にせる結果に外ならない。併しながら、例へば、單なる智育としての倫理學も、若し修養深き人格高き教師が之を講義するならば、生徒は自ら感激に打たれ淸き精神の發動に依つて、所謂血湧き肉躍り或は涙下るの情禁ずる能はざるものがあり、之が屢々繰返さるゝことに依り、次第に感情が醇化され高尙なる情操を持つに至るべく、從つて智育のみに止まらず情育をも兼ね行ふことが出來るのである。更に生徒が此の教訓と感動とのもとに、淸き精神を以て實行の域にまで進むに至らば、意育も亦遂げられたるものと謂ふべきである。然るに、之に反して、若し教師の人格が低いならば生徒には單に倫理學說として腦裡に映するに過ぎないから何等の感動をも與へず、從つて智育のみに止まるのである。卽ち此の感激と實行の有無が情意の發育の如何を支配する事になるのである。

試みに我國の學校教育に就いて觀察するとき、此の邊の效果果して如何？若し生徒が教場に於て不純なる心を持ち、體操場乃至演習場に於て嫌々ながら行動を續け、寄宿舍に於ては不精

なる生活を事とし、儀式に出席を厭ひ、運動競技や室內遊戯等にも互に淸からざる精神を以て立合ふ如き事が度重なるならば知らず識らず惡情操の養成となるのである。故に斯くの如き不純の心は須らく之を一掃し速に淸き精神を以て之に換ふるやう心掛けねばならぬ。教育者の大に考慮を要する點實に茲に存する。

元來、宗教々育は情操教育を主とし意志教育を從とするものであり、體育は之と反對に意志教育を主とし情操教育を從とするものである。而して此の兩者は互に相倚り相俟つて、彼の智育と共に人格の養成上、最も大切なる要素であることは改めて云ふまでもない。然るに、我國の現狀では、指導の地位に立つべき人々までが動もすれば此の兩者を忽にし、而も既成宗教は缺陷多くして殆んど權威なく、民衆は寧ろ迷信邪教に趨り、體育といへば、徒に競技を事とし勝敗を爭ふことに熱中して、その本來の目的を自覺せる淸き精神が之に伴はず、從つて弊害多き有樣である。故に此の狀勢を以てしては、何れも到底十分なる情意養成の效果を擧ぐることは出來ないと思はれる。現に、小學校、中學校、高等學校等に於て此の情意教育が甚だ振はない爲め、恐らく之が主原因となれるものか、遂に大學令を改正して『品性の陶冶、國家思想の涵養を兼ぬ云々』の文句を加へざるを得ざるに至つた。斯くの如きは多分諸外國に其の例を見ざる所であると同時に、遺憾ながら我國教育界の一大缺陷を暴露したるものではなからうか。

更に他方に於ては、內容實質至つて不備不完全なるばかりか我が教育の大精神を明示せられたる「教育勅語」をすら奉讀することの殆んど絕無なる如き學校さへあり、而も世の父兄の多くは、子女の教育を學校に一任して晏如たる狀態を通觀するとき私は實に悚然として長大息を禁じ得ないのである。さればこそ近時我國の一般智識階級、富豪並に上流階級の人々或は其子弟に於て、意志弱く實行力乏しき情操の劣等なる人物の輩出するは敢て怪しむに足らない所であつて、國家の前途、私かに寒心に堪へないものがある。思うて茲に到れば、我國の教育界は正に一大覺醒を以て根本的改善を要するの時機に逢着せることを私は殘念ながら痛感せざるを得ないのである。

私の見る所では、宗教々育も體育も矢張り智育と同じく、成年期に達する迄の間に於て適當に之を施行しなければ效果が充分に擧がらない。先づ宗教的生活の素地は、幼少の頃から日曜學校や家庭に於て、神佛を始めとし皇室祖先等に對し每日行ふ所の禮拜、感謝、誓約等の宗教的薰陶に始まり、この間に於て神、佛、或は天何れの觀念でも歸する所同一であるが、とにかく或る至高至善の理想者――偉大なる力の存在を信じ之に憧憬するやうに仕向けてゆくことが大切である。而して更に長ずるに從ひ組織ある宗教々育と智育とを常に相伴はしめ、斯くして宗教に依つて與へらるゝ淸き精神を以て進んで善き行爲を爲しこれが右の偉大なる最高者卽ち神佛の心又は天意に叶ふ所以であると信じ、以て之に近づき之に一致することに向つて自分自身にも非常の滿足を感じ愉快を覺えるといふ氣分を養ひ育てるやうに絕えず情操醇化の方法を講ずることが必要である。

又體育に就いては、兒童は常に年齡相應の運動を必要とすると云ふまでもないが、殊に十二三歲頃からは大いに思考力を增

すものなるが故に體育も亦此の時分から盛にするのが最も有效であり決して之を閑却してはならぬ。彼の英國の名文祖フイツシヤー氏が大戰中一九一八年教育令を改正して青年子弟の體育を一層重んずることにしたのも同樣の見解に基くものと推察される。然るに我國の運動競技は少數の青年や學生々徒の一部に限られ、未だ一般的に普及せざるは意志教育を忽にせるものと謂ふべく、而もその競技たるや概ね勝敗の決に熱中し、不純なる精神の伴はざるもの稀なりと稱すべき狀態に在ることは實に一大謬弊と認めざるを得ない。されば是非共各人に相應しき運動體育を怠らざる樣心掛くると同時に、徹頭徹尾淸き精神を以て實行することに斯界の改善を期せねばならぬ。

要するに少年少女の頃から修身や倫理に依り教へられたる人の踐むべき道を、神佛の啓示として滿足と歡喜との裡に實行するの習性を訓育することが最大の要綱である。此の神佛に叶ふ尊き氣分、眞の良心が、凡ゆる行爲活動の根本となることが必須の條件であつて、而も之は一時的でなく絶えず繼續して長きに亙ることに依つて始めて心身に適切なる生理的變化を招來し情操は養はれ意志は强くなるのである。換言すれば、智慧の附く頃から宗教の素地に依つて、善を行ふに歡喜の情を以てするの訓練を積むことが肝要であると同時に、總ての運動體育も亦一に此の淸き精神のもとに行はるゝにあらざれば意育の目的に副はないばかりでなく却つて有害なる結果を招くのである。

元來、宗教とは、純眞なる子供が慈愛深き親に對する情操を一層擴張し發展させて之を神佛にまで及ぼしたるものに外ならいのであつて、換言すれば感情の醇化である。例へば、斯くすれば親が喜ぶだらうと考へると、然かすることが子供自身にとつても愉快であり滿足を得らるゝ樣になるものである。これと同樣に、宗教々育を與へられたる子供は、善きことをなせば神佛が賞讃する、その冥加が受けらるゝといふ確信を持ち、さうして彼が長ずるに從ひ益々偉大なる力を信じ其の信念は愈々鞏固となり其の情操は大に醇化して、遂に眞理に憧憬し最高理想の究極を追求することに於て歡喜に燃え滿足に浸る心理狀態を體得するに至り、こゝに彼の動かぬ宗教的信念が築かれ、正しき人生觀が樹立さるるのである。此の情操を體得せしむることに於て、宗教々育は其の本旨を達成し得たるものと云ふことが出來る。

樂しけれ　まことの道を踐みわけて
　　理想の峯に憧るゝ身は

拙詠一首、この間の心理を表現せる積もりである。

後漢劉蒼の所謂『善を爲す、最も樂し』の心持や、眞正なる研究の精神、熱誠篤る行動、浮華を去り分に安んずる眞實の氣分等觀じ來れば之れ皆此の宗教的情操の發露に外ならない。古來我が國民精神の精髓として誇るところの眞の大和魂も亦宗教に立脚せるものたるとを忘れてはならぬ。然るに今日の所謂教育は智識を授くるを主とし『善を爲さざるべからず』『研究せざるべからず』『努力奮起を要す』などと稱するのみにして情操教育に觸るゝ所不十分なるが故に人は之を面倒に思ひ至難に感じ、進んで實行するに躊躇するのである。この意味に於て、人は幼少の時より常に神佛を禮拜し眞摯敬虔の氣分を養ひ、以て宗教生活の素地を培ひ、更に組織ある宗教教育に及ぶことは極めて

大切なる事柄と謂はねばならぬ。例へば基督教徒の祈禱の如き、又佛教徒の念佛の如き、何れも此の目的より見て大に意義あるものと思ふ。

畏くも明治大帝には、儲君におはします時より御父君孝明天皇の御伴を遊ばされ毎朝淸涼殿の御苑に於て天照皇大神を始め八百萬の天神地祇に御祈願を籠めさせられしと承はる。大帝の偉大なる御信仰の素地が如何にして御養成遊ばされしか、之に依つても拜察することが出來る。

國民は一つ心に守りけり
　　遠つ御親の神の教を

の御製を拜するも、天祖卽ち天照皇大神の御教を遵守せる國民を嘉し且つ之を鼓舞し給ふ大御心と共に、大帝御自身は天孫であり、神の御延長であると信ぜさせ給ひ、其の模範を示させ給ふ御信仰の偉大さを伺ひ奉ることが出來るのである。

千早振る神の御代より一筋の
　　道を踐むこそ嬉しかりけれ

萬代不易の惟神の大道を守らせ給ふことは無上の御滿足であり御歡喜であらせられるとの御意であつて、天祖に對し給ふ大帝の御信仰御憧憬の情如何に深く篤くおはしましゝかを拜察することが出來る。

目に見えぬ神の心に通ふこそ
　　人の心の誠なりけれ

大帝が神靈と御交感遊ばされたる尊き御情操が伺はれ、益々其の御信仰の偉大なりし御事が拜察致される。儒教に「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」とあるのも其の意味に於ては同一であるけれども、此の字面には情操の現はれがない、卽ち右の御製は「智情」の尊き御發露であるが後者は單なる「智」の表現である、從つてそれより受くる感銘の深さに於て非常なる相違のあることを見逃してはならぬ。

明治二十三年十月三十日御煥發の教育勅語は實に此の崇高なる御信仰から皇祖皇宗の御遺訓として其の奉ふべき所其の實行すべき所を我々臣民に御明示遊ばされたる有難き大御心に外ならない。故に苟も日本帝國の臣民たるものは只管敬虔眞摯の氣分を以て之を奉讀するは勿論、拳々服膺して以て聖旨に副ひ奉ることに於て無上の歡喜と憧憬とを感ずるやう堅き信仰を持つにあらざれば大帝に對し奉つて誠に相濟まぬ次第である。其の他尙多くの御製や尊き御事蹟の數々を拜するにつけても、偏に天祖に對する高き御信仰と惟神に受けさせ給ふ建國の大精神の御發露にあらざるはなく、實に明治大帝こそは神人一致の大偉人にして萬國の龜鑑、帝王の師表として仰ぎ奉るべき御方と申さねばならぬ。

基督教國たる西洋では、幼時より神を信せしむることに依つて宗教的素地を養ひ、更に長ずるに從つて組織ある宗教教育を授け益々信仰を堅むるやうに仕組んである。中にも彼の獨逸の如きは法律を以て國民は必ず信仰を持たねばならぬと規定してある程である。思ふに、基督、釋迦、孔子のことは云ふも更なり古來世界の聖賢偉人として仰がるゝ人々にして必ず何等かの宗教的信念を持たぬ者はない、之は一々例證するまでもなく、彼等の生涯を知る者の齊しく認むる所であらう。近くは彼の米國の大發明家エヂソン翁の如きも『吾が背後に偉大なる力あり

吾をして發明を成し遂げしむ。此の偉大なる力とは世人が呼んで神となすものである云々』と云つてゐる。斯く考へて來ると『宗教的信念なき者は斷じて偉大なる人格者たることを得ず』と極言しても敢て差支ない。

獨逸の大宰相ビスマーク公は嘗て我が伊藤公に向ひ「日本に憲法を布くには先づ宗教がなければ駄目だ」と云ひ、又島田三郎氏は或人の質問に答へて「日本國民一般には信仰がないから普選を實施しても甘くゆくまい」と云つたさうである。何れも眞に至言であつて、宗教を輕視せる我國民の大に反省すべき點であると思ふ。

さて宗教の大切なること――宗教々育に依つて吾々の感情が醇化せらるゝことは右の如くであるが、此の醇化は量のみでなく亦質の變化であることを見逃してはならぬ。例へば安逸を愉快とする者が勞働を好む樣に變り、贅澤を喜ぶ者が質素を滿足に思ふ樣に變るが如きである。其の愉快とし滿足とする心持は同一であるが其の欲求する方向は宗教的道德的に見て正反對である。此の見地より便宜上、醇化されたる高尚の情操を正（プラス）の情操、醇化されざる劣等の情操を不正（マイナス）の情操と私は呼んでゐる。斯く其の質が正反對であり得るのみでなく、其の量にも亦無限の大小がある。元來、學者の區分に從へば情操には宗教的、道德的、藝術的の三方面があるが、就中最も主要なるものは宗教的及道德的情操教育である。藝術的情操教育も無論必要には違ひないが現時の有樣では前二者の方がより一層緊切であると私は思ふ。卽ち前兩者の結合せる宗教的道德的情操が人格上最も大切なるものである。言ひ換ふれば人格完成上主要條件たる所の私の所謂「マイナスの情操」より「プラスの情操」へ徹底的に完全に醇化せしむるには、どうしても第一の要件として宗教の力に依らねばならぬといふことを、私自身の體驗上からも確信を以て主張せざるを得ないのである、然らざれば道德的情操も藝術的情操も不完全不徹底たるの憾があり、道德や藝術の墮落も之より生ずるであらうと思ふ。

今叙上の關係を例を引いて說明すれば、恰も物體が引力に依つて一定の方向へ運動し、電子が電氣力に依つて特定の活動をなすと同樣、人間も亦偉大なる力卽ち信仰に導かれて始めて私利私慾を捨て大なる理想のもとに進化向上ある生活を爲し得るものである。宗教的信念なき間は、マイナスの情操に支配せられて墮落の道を辿りつゝあつた者も、一朝信仰の救ひに目覺むれば忽ち符號は變化してプラスの情操を贏ち得、據つて虛僞を棄てゝ眞理を辿り、不正を排し功利を捨てて理想を追ふことに無上の滿足と歡喜とを覺える樣になるのである。而も靈なき物體や電子は、特定の活動を爲すと雖も、そは唯外力の支配のもとに無意識の作用を現はすに過ぎないのであるが、人間は然らず自ら滿足と憧憬とを意識し進んで自主的に眞理を辿り向上の道を步むのであるから、彼と此とは天地の相違ありと謂はねばならぬ。人が萬物の靈長として尊き所以は實に茲に存するのである。

然るに斯く偉大なる力を信ずると共に眞理を辿り理想を追ふことに於て歡喜と滿足とを感ずるやうに人格を陶冶するといふ最も重要なる事項は我國一般の教育の殆んど棄てゝ顧みざる所である。而も今日の不安なる生活狀態といひ憂慮すべき思想の

動搖といひ、之皆主として此の缺陷に由り醞釀せらるゝ所なることを氣着かないとは實に慨かはしき次第である。見よ不幸にして宗教的信念を持たざる人は、智識の有無に拘らず、とかく低劣なる私利私慾に支配せられ、奢侈虛榮に流れ易く、眞理を追ふの實行力に乏しく、御都合主義に囚はれ、恰も舵なき舟、轡なき馬の如き生活を營むに止まり、眞に人生の意義に徹し幸福の本質を味ふことは出來ないのである。

今、假りに、酒呑みが酒の害を智識によつて知り得たりとしても、正しき情意の働きが足らないならば、到底禁酒はむつかしいのである。これは其の人の心身が酒を好むやうに生理的に變化されて了つて居るから、此の習慣を棄てるには、先づ其の心身の生理的作用を改めなければならず、從つて普通には頗る困難を感ずるのである。然るに若し宗教的信念を得て、有害なる行爲を廢止することに愉快を感ずるやうにプラスの情操に轉化されるならば、自ら進んで喜んで禁酒するに違ひない。世には宗教の力に依つて所謂「忽然大悟徹底」する例も少くないが、其等は卽ち信仰の偉力に依り腦細胞の生理的心理的過程に著しき變化を生ずる結果に相違ないのである。禁酒の場合で云ふならば、酒を飲みたいといふマイナスの情操が、飲まぬ方が心持が好いといふプラスの情操に一變するのである。この場合若し他から强ひられていやゝ〳〵ながら禁酒するのでは、未だ其の人の情操はマイナスなのである。飲酒の害を悟り喜んで自ら之を斥けるに至つて始めて情操はプラスに轉化されたのである。

惰けることを欲する者と働くことを望む者、他人の爲に盡すことを厭ふ者と奉仕を滿足とする者、他人の失敗を快とする者と其の成功を喜ぶ者、贅澤虛榮を好む者と質素儉約を尙ぶ者等の如き正反對の相違も亦畢竟するに腦髓活動の過程の相違に由るのであつて卽ち當人の情操の正、不正の依つて岐るゝ所である。又他家に寄食する苦學生の中にも利己的の者と感謝の念に滿ちたる者とある。彼等は同じ苦學生でも情操は正反對で從て人格も亦高下の岐るゝ所となるのである。又彼の「愛」なる感情にもマイナスの情操より來るものとプラスの情操より生るゝものとの正反對がある。前者は所謂「不純の愛」であつて斷然斥けねばならぬ。後者こそ正しい眞の愛である。『神は愛なり』『博愛之を仁と謂ふ』の如き「愛」は後者に屬し、同一體としての社會の迷惑や惡影響を顧みざるが如き男女間の不純なる慾望より發する戀愛の如きは前者の例である。ブラウニングの所謂「至上（ベスト）」の言葉を以て値せらるべき眞の戀愛は必ずやプラスの情操に基くものでなければならない。

又政治、經濟、法律、衞生、社會等凡ゆる問題も亦皆如上正反對の動機の存することを洞察し、それに含まるゝ情操の正、不正を明確に辨別して誤らざる對策を講ずることを逸してはならぬ。例へば人口問題にしても只管產兒制限を叫び之が必要を唱ふる人あれど、こは卽ちマイナスの情操を考へてプラスの情操を無視せる短見である、若し人間が總てプラスの情操を持つやうになるならば徒らなる所有の慾望を捨つると共に各人が擧つて生產的に努力し且つ之を愉快とするに至るべく、尙又斯かる人種の移民は世界何れの地に於ても歡迎せらるゝに違ひない、然らば敢て人口を制限するの必要はなきのみならず、人口の增加こそは卽ち國力の增進を意味するものではないか。

然るに學者文士等の中にも自ら體驗のない人は、とかく之を間違へて社會を誤ることが少くないのである。蓋し情操は體驗に依つて始めて得らるゝものであつて知識とは異なる所あるが故である。我國では之を履き違へる人が少くないが、之れは卽ち情操教育を忽にせる結果であると私は思ふ。尙序に附言するが、我國には、專門的研究なるものは便宜上分業的局部的に行はるゝけれども現實は綜合的一般的であることを忘るゝ通弊がある、卽ち科學又は精神の一方のみに囚はれて他方を逸し、或は等しく科學の範圍に於ても凡ゆる專門より考察して問題の輕重大小を取捨按排することが最後の要訣である點に留意しない誤謬を多く見受ける。之が爲め一般世人を誤る例が少くないと思ふ。何となれば、自ら之を正當に批判し其の取捨を誤らざることを一般世人に期待するのは無理なるが故である。學者、識者等の指導階級にある者は此の點に對し深き考慮を怠らず愼重なる態度を採るべきである。

之を要するに、人は宗教の力卽ち信仰の導きに依つて始めて完全に徹底的に其の情操を醇化し其の品性を陶冶し堅實なる信念を持ち得るのであつて、人格完成の第一要素、人間性の教育の根本大綱は正に此の點に存するのである。我國第二の維新は宗教的改革にありと稱せらるゝも此の理由に基くものに外ならない。

今日、學者の間には、過去及び現在の狀態より考察して、人種間の爭鬪は到底避くべからざるものと極めてゐる說もあるやうであるが、若し如上の大方針のもとに宗教々育が極度に發達したる遠き將來のことを想像するならば、各人の情操が非常に醇化され全世界が極めて宗教的になるからして相互間の爭鬪は變じて謙讓となり將た協力となり、全人類社會をして最高理想の究極にまで到達せしめんが爲め他種民族の爲に喜んで奉仕するやうにもなるであらう。こは、旣に古來に於てさへ、君臣の關係が犧牲的にして、君主の爲には喜んで死に就くことを臣下の本分とするといふ精神の發揮せらるゝ例が少くない事實に徵しても、强ち空想ではあるまいと思ふ。

更に體育に就いて尙論及せねばならぬ。世には澤山の實例があるが、其の一として、茲に一人の靑年があつた。彼は少年期から中學時代にかけて胃腸が弱く、又屢々頭痛を感じ、感冒にも侵され易かつたので、これでは將來が案じられるといふので、篤と醫者に相談したら、今の間に運動を盛にするがよい、成年後では效果が薄いといふことを敎へられた。仍つて彼は十八九歲の頃から學業の傍ら精出して凡ゆる運動を行つた。擊劍、柔道、漕艇、野球、庭球、水泳、冷水摩擦、さては種々の勞働をさへ試みた。併し競技の選手になることなどは決して目的としなかつた。只管心身の鍛錬を念とし、一方に偏しないやうにと心掛け、大學を卒業した後も之を怠らなかつた。果せる哉、彼の健康は次第に恢復し、勉强も一層よく出來、從つて學業成績も惡くなかつた。而も大學卒業後何時の間にか總ての病氣は自然に癒り、流感にさへ罹らなくなり、頭痛だの腹痛などは拭ふが如く消え失せて了つた。胃病の無くなつたなぞは節食を續行してゐることも之に手傳つてきゝめがあつたらしいといふ。而も體育の效果はそれのみでなく、彼は意志の强い、實行力の鋭い人となり得たのである。又一方、彼の家庭では宗教を重んじた。それ故彼の受けたる學校教育としてはこの方面が殆んど閑却されて居たにも拘らず、彼の宗教心の發芽は枯死することなく漸々發達して遂に健全なる信仰を贏ち得るに至り、而してこの情操と、かの意志とが、彼の學び得た知識と相合して、彼に正しき人生の針路を示し意義ある生活の眞價を敎へた。今や彼は老境に入つてゐるが元氣猶衰へず、幸福なる活動を續け心中常に滿足と歡喜とに滿ちてゐることを聞いてゐる。

又他の實例がある。それは或る中等學校の校長で、非常に運動に熱心な立派な人であるが、聞く處に依ると、競技を重んずる爲めなのか、生徒に或る一つの運動しか許さないさうである。併しこれでは運動筋が過分に發育するのみで表情を司る筋肉などは發達しないから一方に偏する結果として粗暴杜撰の却つて意志薄弱なる人となる虞があり、體育の主旨に副はないであらうと私は心配する。元來運動の必要條件は種々の運動を行うて萬遍なく全身一樣に發達せしむることにあるは云ふまでもない。若しも生徒が唯優勝を得んとする不純なる精神を以て其の許されたる唯一の競技を練習するやうなことでもあれば、卽ち不正の情操を馴致する結果に陷るのであつて、其の弊決して輕くないと思ふ。尙序に云ふが同じ校長の「飮酒論」の如きも殘念ながら贊成の出來ないものであつて、次の如き獨斷に陷つてゐる。

『純良の酒を少量づゝ服用すれば血液の部分的集積や沈滯を防ぐ效果がある、此の意味に於て酒は百藥の長である。又湯氣を防ぐ爲めとか、或は旅行や運動をした後とかにはやはり少量の酒を飮むことが最も有效な健康法であらうと思ふ云々』

私は斯かるいはれなき臆說の爲に萬一にも世人の禍せらるゝことを恐れて、茲に畏友醫學博士松浦有志太郎氏が某氏へ宛て、飮酒の害を說明した書簡の一節を引證して置かうと思ふ。

「酒精は普通節酒家の用ふる分量よりも遙かに小なる量に於て、旣に著しく健康上に害を與ふることは最近の學術的研究の證明する所である。體重千瓦に對し〇・一瓦の酒精(卽ち體重六十瓦の者に酒精六瓦なるが故に大人に日本酒一合の四分の一にも當らぬ程の少量)を動物又は人體に與ふる時は其の動物も人體も著しくチフス菌又はコレラ菌の如き傳染病毒に對する免疫力を減殺せられて、其の病に侵され易くなるのみならず同時に其の病に對する抵抗力を減少するものであることは千九百〇九年フインランド國「ヘルシンガフォース」大學のライチーネン教授が多數の動物試驗及二百二十三人の人血試驗に於て證明する所である。他にも類似の證明をなした學者が少くない。又最近東京北里研究所に於ても柳澤醫學博士は「チフス及コレラ菌の免疫成生に關する酒精の影響」と題して研究成績を發表しライチーネン教授の成績と殆んど一致する結果を齎らしてゐる。要するに極輕微量の酒精(普通節酒家の用ふる量以下の量)と雖も此が血液中に吸收される時は或期間著しく血液の免疫力卽ち諸種病毒に對する防禦及抵抗力を減殺する事は旣に學術的に證明された事實である。コレラやチフス、ペスト抔の檢疫又は看護に從事せんとする人が酒を飮んで元氣をつけて行くと豫防の效あり抔と云ふ俗說は全く以て反對の事で反つて罹病の危險を增すものである。餘又ライチーネン教授が六百の動物に就てなしたる試驗及人體臨床的調査の事實に於て此の如き微量の酒精又節酒量程度の酒精の爲に遺傳的に子孫の身體發育に惡影響を及ぼすものなる事も精密なる調査にて證明されたことである。

勞働後又は運動の疲勞が適度の飮酒に依つて速に恢復し大に健康を補益するといふ自覺を生ずる事は眞赤な錯覺であつて身體の疲勞の恢復は少量の飮酒でさへ反つて著しく妨害せられ顯目に至るも尙完全の恢復を得さる事は今日總ての生理學者の實驗により證明された所である。

其の他陳べ立てれば數多くあるが、筆の上では思ふに任せない。兎に角小生が一人の敎育ある人に酒害を說明し其の人が十分納得する迄に進むには少くとも二時間以上腦を交へて双方より腹藏なき意見を戰はす必要があると思ふ。

人はとかく自己の常識を以て事を斷じ去らんとする傾向があるが、眞理は必ずしも常識判斷のみによりて決すべきものでない。茲に於て科學の必要を生じ學術研究の必要を生ずるのである。

無線電信電話、潛航艇にて大西洋を橫航することや、飛行機にて自由自在に乘り廻はることなどは一世紀前の常識にては到底可能性を承認することの出來ない事柄であつたが今日では論より證據の事實となつた。之れ皆科學の發明に依る處でなければ何ぞ以て之を說明し得ん。酒精の害毒の如きも數千年來唯の一人も眞相を看破するものなく其の責を免れんや。

私は斯かるいはれなき臆說の爲に萬一にも世人の禍せらるゝ

大活眼(?)のもとに之を排斥したが孔子でさへも只『酒は量なし亂に及ばず』抒と唱へ曖昧な態度を採られた。今日禁酒の問題は實に人類社會の最大問題であつて政治上より經濟上より教育上より道德上より衛生保健上より、どの方面の事業を改造し進歩せしめ整理しようと欲しても先づ第一に禁酒より着手する事が根本的の必要缺く可からざる基礎事業である。世界を支配し世界人類を其の脚下に跪伏して惡道無道至らざるなきものは實に此の酒と云ふ魔王であゝ云々』

右の中等學校長は立派なる人格者でありながら惜むらくは科學尊重が足らない爲め斯かる過誤に陷つたものであらう。精神のみではいけない、之に科學が合致しなければならぬことは之によつて見ても明かである。希くは一日も早く所見を改められんことを切望する。又或る知識階級の一老人は自分が學生時代に運動を忽にした爲め今以て運動の必要を了解せず、從つて時々其の不必要なことを言動に現はすので迷惑させられてゐると聞く。彼は意志の弱い人ださうであるが恐らくさもあるべきことゝ氣の毒に思つてゐる。時既に遲しの感があるかも知れぬが希くは之も改めて貰ひたいものである。

斯くの如き例は尙他にも澤山あることゝ思はれるが、何れも深く反省すべき事柄である。

又運動競技に於ける彼の應援團の如きも、在來よく見受けるやうに、若し多數を恃んで不公正なる、同情なき應援振を發揮するならば、競技の神聖を傷くることは勿論、之に參加せる個人の良心を痲痺せしめマイナスの情操を馴致して、自他共に毒せらるゝ結果となるのである。思ふに、近來盛に行はるゝ野球庭球、籃球、蹴球等の競技の性質を吟味してみても、米國等の健全なる運動界に於ては何れも明かに、勝敗を最後の目標とせず共同一致の精神を養ふことを本旨としてゐるやうである。彼の有名なる英國『ケンブリッヂ』、『オックスフォード』兩大學の競漕の如き、人格智識共に優れ其の上體格も立派にして意志も強き學生を選手に擧げることにして居るので、全校擧つて此の運動を尊重し多大の敬意を選手に捧げてゐるのである。それ故に、彼等は終始清き精神を以て行動し從つて有意義なる團體的訓練の目的を完うし得るは勿論、その所謂フェア・プレーの前に多數の觀衆をして感嘆措く能はざらしむるものがあり、斯くして亦同時に情操教育の效果をも收むる所以となるのである。又彼の獨逸大學生の決鬪の如きも、兩團體間に之を約束し日を期して郊外の建物内に於て之を演ずるのであるが、流血淋漓、壯絶悽絶の光景は私の今尙忘れ難き所である。其の多少野蠻的なる點の可否は別として私が之を目擊したる限りに於ては、徹頭徹尾正々堂々の鬪ひであつて何等卑怯の振舞をなさず、勝敗の決は毫も顧慮せず一に心身の鍛錬を主眼としてゐるのである。斯くの如くにして始めて所謂スポーツマンシップの精神が發揮せらるゝのである。舊來我國の精華として誇れる武士道も亦此の精神と其の軌を一にするものでなければならぬ。

斯くの如く、清き精神のもとに行ふ體育と不純の精神を雜へたる競技とは、其の效果利弊に於て雲泥の差違を生ずるのである。されば此の點に關し周到の考慮を拂うて我國運動界の弊害を除去し眞の體育を奬勵せねばならぬ。これに關聯して思ひ合はされることは、彼の政界に於ける理想選擧の如きである。若し有權者の運動が毫末も不正の念慮行動を混へず正々堂々、清き精神を以て終始するならば、選擧の眞使命を完うし得るは勿論、總ての關係者をして其の情意の涵養上大に裨益せしむる所があるであらう。又彼の京都の西田天香氏を中心とせる一燈園

同人や其の他種々の修養團體の人達が熱心に實行しつゝある奉仕勞働の如きも、其の信仰の力と相俟つて情意の練磨を遂げ體驗を積み以て悟入の域に到達せんとする尊き努力に外ならないと察せらるゝ。此等の事實に鑑み、私は、我國の學校に於ても所謂「運動デー」のみに止めずして米國の例の如く「勞働デー」をも設けられんことを主張したいのである。又家庭及學校に於ける行儀作法を始めとし各個體操、兵式教練、研究に伴ふ實習實驗等苟も筋肉勞働の加はる作業は何れも此の情意の練磨に役立つものなれば、學生々徒は必ず清き精神を以て之に臨むべきもので、決して之を懈けたり厭うたりすべきでない。尙又夏期其の他の休暇中にも努めて清き精神のもとに、天然に親しむ機會の多い農業等の家業を助けて筋肉勞働を試みる如きは最適好なる鍛錬であつて、病氣其の他特別の理由のあらざる限り單なる保養や遊樂的の避暑避寒などは無論避くべきである。

偖て翻つて我國教育界の現狀は、遺憾ながら、既に指摘したる如く、とかく智育に偏して情意の教育を輕んじ若しくは之を誤つてゐる。一般世人も亦敢て之を怪しまないのは、何としても前途の爲め憂慮に堪へない。現下日本の最大病弊は實に此の點に在りと私は斷言して憚らないのである。近時往々にして智識ある罪人を出し又危險思想などの變態的智識階級を見受けるのは、彼等が相當の學校教育を受けながら、其の智情意の發達が不具的にして一方に偏して居るが爲めに外ならぬかと思ふ。

抑も精神の振作とは是れ情意の活動を意味するものである。之に智が結び付きて始めて立派なる人格の力を發揮することが出來る。卽ち科學と精神との合致せる合理的最善の方法を盡し社會の爲に貢獻することに於て滿足と歡喜とを感ずる樣になるのである。智情意の圓滿なる發達とか知行合一とかは卽ち是である。而して情意の涵養は如上、宗教及び體育を基礎とせねばならぬ。從つて精神の振作も亦宗教及び體育の力に依つて之を遂行すべきである。

論じて茲に到れば、一篇の要旨は卽ち下の一結に盡きる、曰く、明治大帝の下し給へる教育勅語の大精神卽ち惟神の道、建國の大綱に準據して、須らく智育に伴ふに上來縷述せる如き健全なる宗教々育及び眞正なる體育を以てし、據つて以て我國教育界の現狀に一大改革を斷行することは、正に焦眉燗額の最大要務である。(大正十五年一月)

大正十五年二月十五日印刷
大正十五年二月二十五日發行

發行者兼印刷者　青柳榮
京都市烏丸二條上ル
內外印刷株式會社
京都市西須磨川通七條下ル
印刷所　內務省出版部

【非賣品】

終